



河村季里 屋根のない車

角川書店

屋根のない車

河村季里

屋根のない車 河村季里

昭和四十九年八月二十五日 初版発行

発行者 角川源義

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三 郵便番号一〇二一

振替東京一九五二〇八 電話(03)二六五―七一一

印刷所 旭印刷株式会社

製本所 宮田製本所



落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872130-0946(0)

屋根のない車

一 19 回目の神経衰弱

コーヒーショップへドストエフスキーのいとこでゲイリーが待っているはずだった。東のトロントへ帰る女子学生を駅へ送ってから、隆はガスタウンへ戻った。ジープンの前ボケットに両手を突っこんで隆は歩道を歩く。

夏はウォーター通りを見捨てかけていた。

青い音をたてて煮えていた、バンクーバーのガスタウンは、急速に冷えていく。萎えかけた太陽が、「ああ、もう終りなのさ」金網で囲われた駐車場のうえで呟いた。

歩道の真ん中に、黄色の花を一本さしたコカコーラの空ビンが立っていた。隆は歩み寄り、ひび割れた下唇をちよつと舐め、ひょいと弾みをつけるとバスケットシューズの先で蹴った。ピンは斜めに通りへ飛び出し、花をつけたままカーブを描いて転がり、むこう側の溝へ落ちた。そのむこうに、ドストエフスキーの赤ペンキのドアがあった。

隆は通りを渡る。渡りきった時、なかからドアが開いた。

「あら、リュウ」

時々ドストエフスキーへ顔を見せる娘で、隆は一度寝たことがあった。よれよれの黒いセーターから香の染みついた釵えた匂いがした。

「あした帰るの。サンフランシスコまで乗せてってくれる車が見つかったから」

「そう……」

「また会いたいわね」

まあね。会えたらね。だが住所をきいてるわけでもない。それどころか名前はなんていったっけ。隆は戯れに、娘の細い金色の髪を一本抜いた。

「いつかね。どこかで会えるさ」

「どこかでね」

娘はだが淋しい顔も見せずに微笑し、「じゃあね」

長いスカートをひきずりそうにして通りを渡っていった。隆はちよつと見送り、指先の髪の毛をふつと宙へ吹きとばした。隆・十九歳。

赤髭のゲイリーは、奥のテーブルで店のオヤジとなにやら話しこんでいた。ゲイリーはヒッピーの地下新聞を

発行するかたわら、週に三日店でフォークソングをやつて稼いでいる。

オヤジは、ピンクのランニングシャツを着て長髪だが六十を過ぎていて、独り者で、全てのヒッピーのオヤジだ。スペイン語フランス語ロシア語を喋り、ヒンズー語へブライ語をこなす。バンクーバーを訪れるヒッピーは、若い連中のスラングで喋るこの陽気な年寄りに必ず一度は会いにくる。この店へきたからといってタダで飯が食えるわけではないし、彼の許しを得なければガスタウンに住めないなどというわけではむろんない。ただ、彼を知っている者なら誰だって、バンクーバーへいったらガスタウンのドストエフスキーへ寄りなというし、いかなる懷疑派も彼に会いさえすれば、傍にいる者全てをどういうわけか幸福な気分になせしめよう人間というものになるほどこの世にはいるのだと悟ることになる。

「ハイ」

隆はふたりに声をかけ、わざと知らんぷりしているオヤジを覗きこんだ。

「コーヒーが飲みたいんだけどな」

すると不意にオヤジは、息も絶えだえというふうにくぐたつたくなって、

「自分でいれた。俺は今日は疲れてる」
空いた椅子でぐったりしてみせた。

「俺だって疲れてる」

「そうかい、きみはこの年寄りをこきつかう気かい？」
オヤジはコンドルみたいに目を吊りあげて横目で睨んでから、「しょうがない、じゃ特別熱いやつをいれてやるか。東洋の王子殿のために」

弱々しく囁かれた声でいい、しかし嘘みたいにさつと立つと古びた木のカウンターをくぐった。

「リュウ」

サイフォンに火をつけながら張りのある若い声に戻り、
「客の食が残したサンドイッチがあるんだが内緒で食うかね、カナダ娘の残したやつだからいいだろう。それとも王子殿には失礼か」

「食うよ、朝からなにも食ってない。それに日本じゃ残りものには福があるっていうからね」

「ほう。それにしちゃ、俺は相当生き残ってるがちつとも福がない。いやちょっと待てよ。生き残った俺の肉を食った奴に幸福が飛んでくるってことかね？」

「さあね」

「オヤジの肉はうまそうだ」

ゲイリーがテーブルのフォークをとって突き刺す真似をした。

「残念ながら俺のほうが長生きさ」

オヤジは大声で笑った。オヤジが笑う時はいつだって大声だ。隆は皿を受けとりに立った。

「リュウ、コーヒーが終わったら出発しようか」

ゲイリーがいった。

「ディックとイレインは？」

「部屋で待ってる」

ディックはゲイリーのフォークの相棒だ。パンジョーをやる。イレインはディックのステディ。中国人の三世だ。

ところがディックは故郷のウィニベグへ帰ってしまふことになった。ただ、彼の場合は夏が終わるせいではない。父親が病気で倒れてしまったんで、家業の食料品店を手伝わなければならないんだという。で、今夜ゲイリーの家で小さな別れのパーティをやることになった。

「イレインとは別れるのかい？」

「らしいね」

ゲイリーの家はバンクーバーから北へ百マイルほど離れた島にあるという。ヒッピーのコミュニオンがあつて、

そこには妻と息子もいるんだそうだが、隆はまだいったことがない。ゲイリーは週末になると帰り、あとはガスタウンですぐす。

「寝袋を持っていったほうがいいよ、リュウ。ベッドが足りないから」

隆はコーヒーを飲みほすと、罎わづになつてゐるすぐ裏のものと材木置場へいった。隅で上半身裸のヒッピーが二人、路上で売る皮のベルトやバッグを作つていた。ここは出入りが自由で、常宿にしているのはゲイリーと隆だけが、ベッドをみつけそこねたヒッピーが入れかわり立ちかわり、毎夜四、五人が床でごろごろしている。

「こいつを持ってつてくれ。さし入れた」

店を出ようとすると、オヤジが奥からビールを一ダースさげてきた。「明日汽車に乗る前にもう一度顔を見せるようになってな」

ゲイリーの五十四年型シボレーはぶさいくな音をたてた。気紛れにパンパン爆はぜる。それも夏の盛りには街の鼓動に呼応していた。今はちょっと空しい。

ウォーター通りからジープン屋の角を右折しようとして、ゲイリーは急ブレーキを踏んだ。後部座席からギターケースが音たてて床に落ちた。

「ちえつ、いつも忘れるんだ、ここがむこうからの一方通行だつてことを」

バックさせながらゲイリーは、アルハンブラホテルの黒ずんだレンガ壁をちらと見あげ、ついで隆へ、髭のなかで口がニッと笑った。

「リュウも、よくまあせつせと通ったもんだ」

「他にすることがないからね。でもゲイリーほどじゃない」

夏の間そのホテルは、フリーセックスに異議を唱えない若い旅行者で満員だった。隆もゲイリーも毎晩のように娘たちの部屋へ押しかけた。

四か月ほど前、隆が日本からバンクーバーへきた時にはすでに夏が始まっていた。北国の爽快な夏が、乾いた青空で笑い声をたてていた。笑い声は若者たちをおびき寄せ、バンクーバーの人口は日毎に増えた。

ロッキーを越えて辿り着く汽車は、抱えこんでいたジーパンたちをぞくぞくと吐き出し、郊外へ出かけた車たちはヒッチハイカーを拾って戻ってくる。気の小さい酔っぱらいの浮浪者が、東の彼方では戦争でも始まったのかしらんと思うほど、夥しいジーパンたちが西の外れの夜景の美しい静かな街へ押し寄せた。たちまちホテルは

満員になり、ある者はアラスカへ北上した。ある者はロッキーの山奥へひき返した。「でもロッキーも満員さ。寝袋さえ持ってりや問題ないけどね」

連中に共通していることは、ジーパンをはいていることと他に、どいつもたいした金は持っていないということだった。カナダやアメリカの若い奴らは、出発してから金の勘定をする。

日は気遣いみたいに長くなっていった。盛りには夜の十一時だというのに子供が表で遊んでいた。労働者たちは仕事が終わってから泳ぎに出かけた。

若い連中はガスタウンに集まり、三つのビアホールはアルハンブラホテルの裏のブラッドアレイ広場とともに彼らが占領した。街角という街角でギターと歌の輪ができ、浮浪者や酔いどれのインディアンたちもそれに加わった。広場は三日にあげずフォークやロック大会の会場になった。

娘たちと仲好くするのは簡単だった。言葉に不自由な隆でも、祭気分の広場で、ごったがえすビアホールで、根気よく食いさがればなんとかなった。時には酒とマリワナが脇からブッシュした。ガスタウンにはビアホールが三つあって、それぞれ客層があった。美人がよくくる

のは「ヘアンカー」よりも「ドミニオン」だが、気軽につきあってくれる娘は「ヘアンカー」のほうがいいというように。

数軒のホテルも同様で、あるホテルにはまるで養老院みたいにな年寄りばかりが詰まっていたし、インディアンが多いホテルもあった。そしてどういふわけか、かわいい娘たちはこのアルハンブラに溢れていた。

「しかしここもそろそろ淋しくなるなあ。皆帰っちゃう」

ゲイリーがギアを入れ替えながらいった。

ディックとイレインは地下室を借りて住んでいた。

ゲイリーはエンジンをかけたまま車に残り、隆が芝生を横切つて明り通りの窓を叩くと、

「今いく」

ディックの声があり、しばらくしてふたりが出てきた。

イレインに会うと隆はふと親近感を覚える。同じ東洋人のせいだ。もっともイレインは中国語は全く話せないカナダ人だが。

「ハイ」

隆の軽い声にイレインもディックも笑みを浮かせたが、

しかしすぐに消えた。ふたりの間には、部屋からそのまま持つてあがつてきたというように重い気分が纏りついていた。別れの淋しさなどという感傷よりも、もっと沈滞して頑固な気分。それはたちまち隆の皮膚にも伝染し、三人が車に乗りこんでドアを閉めると、激のように充満した。ゲイリーはすばやくそれを察し、車を出しながら努めて軽い声を出した。

「部屋はかたづいたかい？」

だがそれも空しくディックは沈鬱に眉をひそめたまま、「イレインが友だちを連れてきてこのまま住むことになったんだ。だからかたづける必要がなくなった」と答え、ついでイレインが昂ぶった声をあげた。

「だから、かたづくのはディックの荷物だけなの！」

隆とゲイリーは思わずふりかえった。

「あたしはあの部屋でディックが戻るのを待つんだわ。

だからディックだって荷物は置いといたらいいのよ。それをどうしても持つていってしまうんだって。ほんとうに戻ってくるんだったら置いとけばいいじゃない。あたし、わからないわ」

イレインはほとんど叫んでいた。

「……いつになるかわからないからさ」

ディックは深い疲労をあらわしてぼそぼそいった。

「だったらあたしはなにを頼りに待てばいいの？」

ディックがなにかいいかける。イレインが待つ。だがディックはただ長い息を吐いた。

「また、愛してるっていうつもり？……三日も経てばあなたの匂いは部屋から消えてしまうわ。遠く離れて。会えなくなつて。あるのは口をきかない写真だけ。でも荷物があったら、あたしはディックが戻るのを信じていられるわ。愛なんかより、あなたの荷物のほうがよほど確かよ！」

隆はバックミラーを覗いた。ディックの口を閉ざしてしまった顔があった。窓の外をみつめている。

……あいつも大変だ。あいつだってイレインが好きなのだ。だから別れようなんていい出せやしない、戻ってきたいとも思っている。だがそれも、父親の容態次第なのだ。

しかし、と隆は思う。もしディックが荷物を置いていき、そのまま永久に戻らなかつたら、イレインはそれでも後生大事に荷物を守り老いさらばえていくのだろうか。

沈黙に苛だつてイレインがいった。

「ウィニベグってどこ知ってる？ 遠い遠い東。カナ

ダは宇宙よりも広いわ」

隆はレバーをまわして窓をおろした。風が吹きこんだ。車が不謹慎に大きく爆ぜた。パンクバーの市街を北へ抜ける。

「いつそウィニベグへいったらどうなんだい、イレインも？」

風に顔を向けて隆はいった。

「学校があるわ」

イレインが乾いた声を出した。

学校なんかやめてしまえばいいじゃないか。隆がそういう前に、ディックがイレインのためにいった。

「学校だけじゃないんだ。家族のこともあるんだ。イレインは退学届けを出すところまでいったんだ。けど問題が多すぎるんだよ。どう悪戦苦闘して考えてみても結局だめなんだ。俺が親父のために帰らなきゃならないのと同じことなんだ」

イレインはこぼれ落ちそうに涙をためて、車の天井を見あげていた。隆はバックミラーから目を外そらせた。

やがて、

「着いたよ」

ゲイリーがほっとしたようにいった。

車はカーフェリーのための小さな港へおりる坂をくだった。

日が暮れかかっていた。

日没はすでに終わり、遠い海上の島影を浮かせて消えている寸前の微かな光芒が残っている。それはかろうじて港までとどき、逆光になってクリーム色のフェリーに淡い縁どりを与える。海は夕映えも褪せ、夜を待機してまったく動かない。ゆるやかに渡る風に、死んでいく夏のなごりの匂いがあつた。

その日最後のフェリーはなかなか出ようとしなかった。四人はロビーに座って薄くてまづいコーヒを飲んだ。会話はとぎれがちで、ゲイリーは、ドストエフスキーのオヤジはかつて一度も結婚の経験がないというけれどホモでもないらしいというような話をしたが、ちっとも弾まなかった。ようやく出発の汽笛が空元気を出して吠え、と、四人は一樣にはっとした。

フェリーは一時間ほどで島に着いた。

車はやたら爆ぜて山道へよろめきこむ。

すでに闇が浸っていた。ヘッドライトが道へ被さる豊かな木々を照らし出す。しばらく曲りくねった道を走らせると、ゲイリーは車を寄せて止めライトを消した。左

手の茂みの奥に灯が見え、犬が吠えた。

「着いたのかい？」

隆がきくと、ゲイリーが答えた。

「仲間の家さ」

人の足が踏んでできたという感じの、藪のなかの真っ暗な細い道をゲイリーが先導した。両側の闇から鋭い藪の小枝が襲って手や顔を叩き、耳元を不意にカナブンが飛んだ。闇からの闯入者に脅えて犬がけたたましく吠えた。家のなかで人影が動き、入口の灯りがついた。

背の高い主のブルースはアラビア風のガウンを着てパイプをくわえ、妻のシボンヌは蹠までのゆったりしたスカートを纏って四人を迎えた。一緒に入ってこようとす

る犬を、シボンヌが子供のいたずらを咎めるように外へ閉め出してから、すでに知り合いの三人がふたりと握手を交わし、ゲイリーが隆を紹介した。夫婦は穏やかに微笑した。

小さいががっしりしてひと目で建てたばかりとわかる綺麗な家だった。微かに木の香りがする。それにインド産の白檀の匂い。低い丸テーブルの中央で線香がゆるやかな煙をたて、それが客の気配にゆらいで乱れた。

「いい家だな」

隆が見まわすと、

「ブルースは大工なんだ」

ゲイリーがいった。

大工？　ぎっしりと並んだ本が壁をうずめ、隅のバイオリンと、楽譜を重ねた譜面台と、香と、それにブルースの髭の間の色白な顔と長髪は、隆の抱く大工というイメージからかなり遠い。

床の絨緞やソファや手製の木椅子に分かれて座ると、ブルースはくわえていたパイプをやめ、真新しいパイプをとり出し、マリワナの枯草を指でほぐしては詰めた。

まわして吸う。パイプは爽やかな檜の香りがした。シボヌが紅茶を入れてくると、ブルースがテーブル脇の大瓶から蜂蜜をスプーンで掬って混ぜた。

「ディックがウィニペグへ帰るんだよ」

ゲイリーがいった。

「親父がひっくりかえっちゃったのさ」

ディックがいった。

「……………」

ブルースはちょっと顔を硬ばらせ、黙ってディックをみつめた。シボヌはディックではなくイレインを抱きしめた。ふたりとも白人特有の大袈裟な身振りはしな

った。

パイプがまわる。

「オヤジは元気かい？」

しばらくしてブルースがゲイリーにきいた。「もうひと夏会っていない」

「あいかわらずさ。タフだよオヤジは。この夏だけで何百人相手にしたんだろう。まるでこづきまわされているみたいだった。身の上相談からコンミュン原理、インド哲学、密教……だけどあんなに親身になって面倒みてやることはないんだよ、馬鹿が多いんだから。まともな奴は十人に一人いないね」

「しかし、馬鹿とか利口とかという発想はオヤジにはないからね」

マリワナは次第に情緒の癡りをほぐした。イレインの目からもさっきまでのひきつった色が遠ざかった。

「シボヌ、赤ン坊は？」

「奥で寝たところよ」

「見にいい？」

「ええ、もちろん」

——三十分ほどの休息が四人に思いがけぬ効果を与えた。フェリーを待っている時とはまるで違つてとてもく

つろいだ気分を抱いてふたりの家を出た。

隆は冷え始めた島の外氣にぶるっと体を震わせた。

「腹が減ったな」

「急ごう。わが愛するダイアナたちが晚餐の仕度をして待ちくたびれてるよきっと」

ゲイリーからきいて隆が想像していたとおりに、小さな湖とそのほとりの小さな家の影が星明りのなかに見えた。

だがブルースとシボンヌの家みたいに新しくはなく造作も丸太小屋と呼ぶべきで、電灯もなかった。それでも大ぶりの石油ランプに加えて（今夜は特別なのだろうか）幾本ものローソクが立てられ、暗闇を抜けてきた者には充分の明るさで、そのなかに隆が初めて出遇う三つの顔があった。ゲイリーの妻ダイアナと、五つになる息子のシャノンと、それに仲間のジーン。

ダイアナと握手を交わしシャノンとも握手を交わし、ついでジーンに顔を向けると、ジーンは挨拶などそっちのけで食べかけていた果物の一片をナイフで挟とりナイフに乗せたまま隆にさし出した。

「おいしいわよ。アバカード」

ジーンは人なつっこい笑顔を見せた。形のいい唇から

白い歯がのぞいた。上の門歯二枚が他の歯に較べてちょっと大きすぎた。兎みたいだと隆は思い、いつかいつてやろうと思った。

「うまいね。もつとくれよ」

ジーンはまるごと手放し、ナイフを添えて隆に渡した。大きな門歯をさらに見せて笑いながら。

それには見向きもせずゲイリーは、もうテーブルにかがみこみ、十人分はある大きなコンビーフの塊を切っている。ダイアナがバケツみたいな鍋をプロパンガスのコンロからおろす。ジーンも加わって大瓶の葡萄酒のコルク栓を抜く。お化けみたいにでかいふかしたじゃがいも馬が食うほどのサラダ。莢豌豆の煮物。ボウルから溢れんばかりのコーンと鳥のシチュー。チーズにバターにグレイヴィーにパンにスバゲティにソース……。

「あたしたちが今所有してる食料はこれで全部。あしたもここに居るつもりの人には適当に残しておきなさい」

ダイアナがいった。

息子のシャノンも含めて食欲はすこぶる旺盛だった。が、結局、あしたもここに居ない関係なく、満足の溜息について腹を抱える総勢七人の前に相当の食物が残った。

葡萄酒の軽い酔いも手伝って、誰もが怠惰になった。シャノンにもゲイリーが戯れに飲ませたので、まだ五つだというのに唐辛子みたいな顔をしてしまりのなくなつた口をムニャムニャさせ、焦点の定まらぬ目を宙にとめている。誰もが口を開くのもおっくうというようすで間延びした会話を泳がせているうちに、やがて彼はガクッと前のめりになり、額をテーブルに打ちつけてそのまま眠りこんでしまった。

しばらくは放っておいたが、ようやくゲイリーが寝かせるために立ちあがり、ダイアナもテーブルをかたづけするために立った。ジーンが皿を集めて流しへ運び、イレイン、ディック、隆もそれに加わった。あのもと、材木置場は、食器を使ったら使った者が洗って元どおりにする。個々の食器は誰の所有物でもないのだから当然だが、ここでもそれがルールになっているようだった。

立ち働いたおかげで胃が楽になった。すっかりかたづけ終わると床に座ることにした。

ゲイリーがビールを持ち出した。ジーンは小さな三角帽子型の香を皿のうでで焚く。ダイアナは石油ランプを消し、蠟燭も数本に減らした。それは床に様々な角度から幾重もの人影を作った。時折揺らぐ。静かだ。あまり

静かなので蠟燭の炎の音が聞こえそうだ。子供の頃ウィニベグで暮らしたというダイアナが、ディックと故郷の話をする。

「ずっしり重い皮の雪靴で小学校へ通ったわ。ああ、あの寒さったら。バンクーバーの冬なんて問題にならないわね」

イレインはほとんど口を開かない。ディックの肩に頬をつけて寄りかかっている。膝の前の蠟燭をみつめ、その火が乾いた目に映ってまたたく。ジーンはすぐに燃え尽きる香の番をして、新しい三角帽子に火をつける。しばらくして、ゲイリーが、ケースからフォークギターと一枚の紙切れを取り出した。

「ディックのために歌を作ったんだよ。ジーンとダイアナが詩を書いて俺が曲をつけたんだ」

ふたりはゲイリーの両脇から紙切れを覗く。ゲイリーが弦を弾く。イレインの肩を抱きながらディックは三人をみつめる。

ぼくらは朝の太陽を見てディックを思い出さだろう、太陽はディックが帰る東から昇るのだから、雨が降ったらディックは泣いていると思うことにしよう、曇りだったら憂鬱になつてと思うだろう……。

「ありがとう」

三人が歌い終わると、ディックは紙切れを受けとっていいねにたたみ、ポケットにしまつてから、三人と長い握手をした。

ゲイリーは再びギターを抱えて歌い出した。ビートルズの初期の曲だった。ジーンと一緒に歌う。どちらかといえばゲイリーよりもジーンのほうがうまかった。バエズが十年若がえつたという感じの声で、歌い方はそっくりだ。

隆が見まわすと部屋の間、薄暗がりにギターがあつたとりに立つ。ガットギターだった。チューニングしてから、ゲイリーがブレイクすると同時にキーボードのメロディを弾き、歌に入るとコードを叩いた。ゲイリーが、ディックが、イレインが、意外な顔をしてふりかえつた。隆はかなりうまかった。五、六年の経験だがひところは氣違いみたいに凝つた。ビートルズはほとんどやつた。ひき出せば、頭で忘れていても指が覚えていた。

隆の歯切れのいいガットギターが曲に生彩を与えた。いいかげんにひいていたゲイリーが座りなおした。ジーンは声を張った。

曲が終わるとゲイリーはちょっと興奮していた。隆だ

つてかなりいい気分だった。最初はちよつといじくってみるくらいのつもりだったが、ゲイリーとジーンが乗ってきたのでつられて隆も乗った。

「驚いたな。リュウがそんなにうまいとは思わなかつた」

ゲイリーが大声を出すと脇からディックがいった。

「どうだい、俺の替りはリュウに頼んだら？」

「ああそうだな！ 当分は俺ひとりでやろうと思つてたんだが……どうだいリュウ？」

考えてみたこともなかつたから、隆はちよつと戸惑つた。

「それともディックや女たちみたいに、リュウももうバンクーパーから消えるってのかい？」

「いや、もうすこしいそうだな。俺はガスタウンが氣にいつてるからね」

「だったらゲイリーと組みなよ。報酬だつてひとり食う分には充分すぎるぜ」

ディックが追いうちをかけた。

「そうだな……。俺のギターでよけりや」

隆は頷いた。毎日ぶらぶらしてやることもないのだ。むろん金だつて欲しい。

「よし、さっそくあしたから練習を始めよう。歌もできるんだろ？」

「ビートルズならね。もっとも俺の英語でわかるかどうか」

するとイレインが口を挟んだ。

「あたしさっきも思ったんだけど、あなた英語がすごくうまくなったわよ」

「でもイレインとはつい二週間ほど前に会ったばかりだぜ」

「だってほら、すぐくなめらか。あたしが喋ることもいちいち返さなくなったし」

「そうなんだ、俺もこのところそう思ってるんだ。なんだか最近になって突然うまくなったみたいだ」

ディックが同意した。

「今までは喋れないふりをしてたんじゃないのか？ ギターみたいにさ」

ゲイリーが手を伸ばして隆の脇腹をこづいた。

「そんな器用なことができるもんか。ギターだってひけないふりしてたわけじゃないさ。ゲイリーは演奏が終わるといつだってさっさとかたづけちゃうじゃないか」

「そりゃ、ま、商売道具だから……」

「それよりも」

隆はジーンを見やった。「ジーンにも頼んだらどうなんだい？」

「あたし、やりたい。でも土曜と日曜はだめね。ピアノを教えるにかなきゃならないもの」

「問題はオヤジだな。三人分の金を出すかどうか」

ゲイリーはギターの腹をコツコツ叩いた。「よし、あした掛け合ってみよう」

翌朝。隆はジーンとふたり島に残った。ディックを送るためと食糧などの買物もあって、ダイアナとそれにシヤノンも車に乗った。イレインはディックに身を寄せて座った。青ざめて見える。

「ぼくがジーンとリュウのかわりにディックを見送るよ」

シヤノンがわざわざ降りてきて生意気をいい、鼻の穴をふくらませた。

かわいそうに身に余る重量を乗せたシボレーが、急カーブを曲って見えなくなつてからさっそく得意の爆発を起こし山間に斜した。顔を見あわせて笑い、隆とジーンは家への坂を登る。右側には、湖が木々を分けてひろが